

なくなる食物のためにはなく

作：岡崎ルツ子

演出：小川政弘

(会社の部屋。リーンリーン鳴り響く電話。早口で忙しそうな人々の声)

高島恵美子 ちよっと、だれ、田中商事の仕事受けたの？

山本^{ひろし}洋 …あ、はい、僕ですけど…。

恵美子 「あ、はい」じゃない。締め切り期日が確定してないじゃない。それにこんなレポートの書き方じゃ…。

(陰で)

部下1 また始まった…。すごいわねえ。

部下2 お^{つぼね}局様、最近ますます怖いよな。山本、ボーとしてるから、目つけられるんじゃないの？

部下3 彼女、マンション買ったってうわさだぞ。横浜だつてさ。

部下1 ひえ～、すごーい。張り切ってるわけだあ。

部下2 でもさあ、いくら美人で仕事ができてもねえ、ああキツイ性格じゃあさ、男の人も逃げ出すよなあ。

部下3 マンションくれるっていっても、お局様じゃ、おれだつてやだよ。

恵美子 そこ、何こそこそしてんの、仕事遅れるわよ。それともまた残業するつもり？
こう不景気じゃ、そうそう残業手当なんて出せないのよ。

部下たち すいませーん。おお怖ーい。

ナレーション わたしは高島恵美子。都内の有名おもちゃメーカーに勤めて10年目のキャリアウーマン。仕事ぶりが認められて、同期の中ではいち早く、去年主任になった。いまだ独身。陰でお局様とかいろいろ言われてるけど、そんなこといちいち気にしてられない。わたしはわたし、と頑張ってきたんだけど、最近どうもうまくいかない。原因は、どうやら山本洋という新入社員の指導に当たってから。山本はおとなしい優しい性格なのだけど、どうもボーッとしてるといふか、欲がないといふか、今時、こんな仙人みたいな男の子がいたとはちょっと驚き。

(食堂。ざわざわしている)

部下2 いっただっきまーす！

恵美子 そういえば、2時からの打ち合わせ、先方から遅れるって連絡が入ってね。ちよっと山本、何してんの？

部下3 しー、今話しかけてもダメですよ。お祈りしてるんですから。

恵美子 お祈り？

部下1 あれ、主任知らなかったんですか？ 山本はクリスチャンなんですよ。

恵美子 へえ、そうなんだ。ま、らしいね。

洋 頂きます。

部下3 おい山本、そのお祈りってさ、3回分まとめてするってわけにはいかないのかよ。

洋 いやあ、僕たちこうして食事を与えて下さった神様に感謝してるんです。一食ごとに感謝ですから。

部下1 へえ、やっぱりお前、変わってるな。

洋 はあ。そうですかあ？
(パチンコ店。ガチャガチャという音)

ナレーション ストレス解消には今のところ、これが一番。最初はある入りなかつたけど、セミプロの友達に台の見分け方を教えてもらってからは、当たりだして面白くなって。パチンコにハマってからは、これが社会現象になるのもわかる気がする。
(駅のホーム、駆け込む恵美子、電車が発発してしまう音。)

恵美子 あーん、行っちゃったあ。パチンコに夢中で、時間忘れちゃった。あーあ。

ナレーション 気分直しにガムをかもうとバッグに手をやろうとして、わたしは青くなった。

恵美子 あっ、バッグがない。

ナレーション あのシャネルのバッグは日本でも新宿にしか売っていない貴重品。だれかに拾われたら、戻ってこないに決まってる。

恵美子 ああ、どうしよう、どこに落としちゃったんだろ。

山本隆 あのう、これ、お探しですか？

ナレーション 振り向いたら、大学生らしい若い男の子が立っていた。ちょっとふっくらとしていて、田舎っぽい服装だけど笑顔がさわやかだ。手に差し出しているのは、紛れもなくわたしのシャネルのバッグ。

恵美子 ああ、それ、わたし、わたしのです。ありがとう、ほんと、ありがとう。

隆 よかった。階段の下であなたの肩から落ちるのを見たので、急いで追いかけてきたんです。電車に乗られる前でよかった。

恵美子 本当にどうもありがとう。これ、大事な物なんです。あ、そうだ、何かお礼を。

隆 そんな、お礼だなんて、いいんです。あの、電車が来ますので失礼します。

ナレーション 翌日の契約は、例の半人前の山本洋と一緒にだった。仙人みたいにのん気な山本に、手取り足取り教えながらの仕事は、少々くたびれた。その帰り道。

洋 それで、その男の子の名前、聞けなかったんですね？

恵美子 そうなのよ。お礼もできなかった…。いまどき、あんな誠実な子がいたなんてね。

洋 バッグが戻ってきてよかったですね。きっと神様が主任を守ってくださったんだな。

恵美子 うん、そうかもね。なくなったのに気づいた時は、さすがのわたしも「神様」って気持ちだったもの。…それよりもう7時だし、何か食べて行こうか。初契約のお祝いにおごってあげる。

洋 うわー、ほんとですか。…あ、じゃあ、この近くでおいしい所、僕知ってるんですけど。

恵美子 いいわよ。任せる。

ナレーション こうして山本に連れていかれたのは、繁華街からかなり離れた、静かな住宅街の一角。小さな2階建ての家だった。

洋 ただいまあ。
(奥から弟の剛が走ってくる。)

剛 お帰りなさい、お兄ちゃん。あ、だれ？

洋 ただいま、剛。お客様だぞ。お兄ちゃんの上司で高島主任さん。

剛 こんばんは。

恵美子 こんばんわ。

洋の母 まあ、ようこそいらっしゃいました。いつも洋がお世話になっています。さあ、どうぞどうぞ中へ。お寒かったですでしょう？

恵美子 [小声で] おいしいところって君の家だったの。それじゃ悪いわよ。わたし失礼する。

洋 いいんですよ、まあ、僕には一番おいしいところですから。主任にもぜひ食べていたたきたくって。

洋の父 初めまして、洋の父です。狭いところですがどうぞ、どうぞ。

隆 こんばんは。兄がお世話になっています。

恵美子 あ、あなたは…、昨日駅でバッグを拾ってくださった…。

隆 あ、あの時の…。

恵美子 やっぱり。本当にあの時はありがとうございました。

ナレーション 偶然ってあるものだ。バッグを拾ってくれた男の子が山本の弟、隆君だったなんて……。

父 おい、おい、何の話だい？

母 ささ、どうぞ、中へ。お食事のあとでゆっくり聞かせてくださいな。

ナレーション こうして思いがけず、わたしは山本の家で夕食をごちそうになった。それは決してぜいたくなものではなかったけれど、心温まるおいしい食事だった。山本の家族はみんな似た感じだ。にこにこして細い目をますます細くしている。彼の家庭の清そな印象を心に刻んで、わたしは久しぶりに、何とも言えない温かい気持ちで家に帰った。

(恵美子のマンション。ガチャ。キーを回し、取り外す音。)

恵美子 ただいま……。ポチッ。

留守電 ゼロ件です。ピー。

恵美子 はあ……。

ナレーション 改めて見回すと、我がマンションは最新の設備がそろっている。大理石のキッチン、鏡ばりのクローゼット、中にはシャネルやグッチのブランド物の洋服の山、クリスタルの置き物、輸入物の家具。何でもありだ。独身貴族とはよく言ったものだ。でも何か足りない。それは何だろう。例えば、わたしが家庭を持ったとしても、あの山本家のようにはならないような気がする…。

恵美子 そうよね。わたしに子供ができたらさ、あんなボーっとしたお人よしには育てたくないわよーだ。ね、テディー？

ナレーション そう言いながらポーンと投げたクマの縫いぐるみは、かわいそうに、ソファに当たって転げ落ちた。

ナレーション 数日後、わたしは山本洋を連れて、ある得意先に納期の遅れのおわびに出かけた。アポを取った責任者は急用で留守だったが、帰る途中で電話を入れた。これも、山本に学んでほしいフォローだ。

(街頭。人混み、車のクラクション等。)

恵美子 はい、…ええ、わかりました。本当に申し訳ありません。では、失礼いたします。

洋 先方、何て言っていました？

恵美子 製品が完成するまで待っててくれるって。ほっとしたわよ。

洋 よかったですね。こちらの誠意が通じて。

恵美子 やっぱりさ、…あれ、いない？

ナレーション 振り向くと、山本は往来の真ん中で立ち止まり、何やら手を組んで下を向いている。じきに顔を上げると、にこにこしながら走ってきた。

恵美子 何、またお祈りってやつ？

洋 はい、うれしくて、神様に感謝のお祈りです。

恵美子 Jリーグのビス何とかって選手みたいじゃない。

洋 (笑う)でも、うれしいな。彼の信じてる神様と僕の信じてる神様と同じなんですよ。

ナレーション その時だった。急にめまいがして、わたしは気分が悪くなってきた。頭の中からさーと全部の血が足に流れていっちゃう感じ。

恵美子モノ …あっ、あっ、どうしたんだろ、気が遠くなる…。

洋 主任、どうしたんですか？ 主任、主任！

ナレーション そのままわたしは、意識を失ってしまった。

<後編>

ナレーション わたし、高島恵美子。都内の有名おもちゃメーカーに勤務して10年目のキャリアウーマン。主任になって部下も抱え、張り切っている。と言うと聞こえはいいが、現実のわたしは、仕事に追いまくられ、マンションのローンの返済、休日にはパチンコ、仕事の付き合いの飲み会、カラオケなどなど、結構キツイ毎日なのだ。そんな中、今年の新人、珍しくもクリスチャンという山本洋には、少々リズムを狂わされている。

そんなある日、山本と二人で外回りの工作中、わたしは急にめまいを起こし、気を失ってしまった。

(山本家の部屋)

ナレーション 気がついたら、見知らぬ部屋だった。古い洋服ダンスや、机が置いてある殺風景な部屋だ。その畳の真ん中に布団が敷いてあり、そこにわたしは寝かされていた。フランスベットと鏡張りのクローゼットのあるわたしのマンションの部屋とは大違い…。ふと見ると、小さな壁掛けが掛かっていた。

恵美子 「…なくなる食物の…ためではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る…食物のために…働きなさい。ヨハネ…6章27節。」何だろ？

(ノック)

隆 高島さん、起きてらっしゃいますか？

恵美子 あ、隆君、剛君、ここは山本君のお宅だったの。

ひとみ 夕食の支度ができてます。どうぞ、一緒に。

恵美子 ええっ、夕食？ もう、そんな時間？

剛 高島のお姉さん、ずーっと寝てたよ。とっても疲れていたんだね。

恵美子 ごめんなさい、もうすっかりお世話になって。もうわたし、これで…。

ひとみ あ、だめですよ。まだ。そんな動いちゃ。

恵美子 でも、これ以上ご迷惑をおかけするのは…。

洋 隆の言う通りです。しばらく休養と栄養が必要だって、先生が…。

ナレーション 見ると、山本の顔がのぞいていた。よりによって、日ごろビシビシ搾ってきた彼に助けられるなんて、ひどく恥ずかしかった。

恵美子 「先生」って、やだ、病院に行ったの？

洋 いえ、脈も呼吸も大丈夫だったので、とにかくタクシーで家に運んで、かかりつけの町医者に来てもらったんです。そしたら…。

恵美子 そしたら？

洋 過労と栄養失調だろうって。おいしいごはんを食べさせてやんなさいって。

恵美子 やだ、かっこ悪い。わたしとしたことが…。

洋 病気にかっこいいも悪いもないですよ。しっかり休んで下さい。

隆 ほんとに遠慮しないで下さい。おかゆ、もうできてますし。無理しないでくださいね。

ナレーション とにかくマンションに帰りたかったが、体が思うように動かない。申し訳ないけれど、山本家のご厚意に甘えることにした。
翌日にはめまいも治まり、食事も少しずつ取れるようになってきた。
(山本家のダイニング)

恵美子 ごちそうさまでした。

母 もうよろしいんですか？ イカの煮物、お代わりなさいませんか？

恵美子 いいえ、もう結構です。

隆 お母さん、そんなに勧めちゃ高島さんに気の毒だよ。まだ本当じゃないんだし。

母 そうね。ごめんなさいね。

恵美子 そんな…本当においしかったです。実家の母も、よくイカ大根作ってくれました。懐かしい…味です。

ナレーション ちょっぴり涙が出てきた。ご家族に悟られないよう、そっと目じりをふいた。
夕食後、山本のお父様が分厚い黒い表紙の本を抱えて、茶の間に戻ってきた。
あれはひょっとして、聖書ってやつだろうか。

父 わたしたち、まことの神を信じる者は、デボーションといって、神に祈る時を持つんです。申し訳ないが、今晚は高島さんにもご参加いただいて、…よろしいですか？

恵美子 ええ、どうぞ、構いません。

ナレーション 何の抵抗もなくそうやってしまったのが我ながら不思議だ。この一風変わった

人たちの大事にしている時というのを共有したい気持ちになったのだ。

父 …今晚の聖書箇所は、ルカの福音書 10 章から、「さて、彼らが旅を続けているうち…」

ナレーション それは興味深い話だった。マルタとマリヤという姉妹の家へ、イエス・キリストがお客に来る。マルタは喜んでいろいろおもてなしに忙しい。ところが、マリヤはイエスの足下に座って、そのありがたい神の国の教えにじっと耳を傾けている。忙しくて少々いらだっていたマルタは、あろうことか、イエスに妹をしかって自分の手伝いをさせるよう進言するのだ。食事の支度、ベットの用意、マルタはあれこれ心配し、気を遣っている。何だか、自分の姿を見るような気がした。

(回想)

(電話の鳴る音)

恵美子 何ボーッとしてるのよ。いつまでも学生気分じゃ困るのよ。

(パチンコ店パチンコの音)

恵美子 入れ、入れ……。あー、今日もツイてないなあ。

(カラオケ・ボックス)

恵美子 それじゃあ、高島恵美子、ピンク・レディのモンスターいきまーす。

ナレーション あれもしなくちゃ、これもしなくちゃ、いろいろ気を回して、欲張って、いらだって、あせって…。それで…わたしは…？

父 「イエスは答えて言われた。マルタ、マルタ。あなたは、いろいろなことを心配して、気をつけています。しかし、どうしても必要なことはわずかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません。」(パタンと聖書を閉じる)

…イエス様はマルタをしかったわけではなかった。優しく諭されたんだよ。現に、「マルタよ、お前もマリヤと同じにここに座ってわたしの話を聞け」とは命令されなかった。もてなしも大切だが、マリヤはもっともっと大切な事を優先しているのだ。その事を教えようとされたんだね。ただマルタの大切にしているもの、衣食のことをないがしろにしていけないということではない。それらは、大切だが第一ではない。第一に大切にすることは…。

剛 神様を求めることだよね？ 神様を第一にしたとき、ほかのすべてのものは与えられるって、聖書に書いてあった。

洋 剛、お前、かっこいいじゃん。

母 隆、ちゃかさないの。

父 剛の言う通りだ。この世の中で本当に必要なものは、神を知る、つまり永遠の神の国を求める、ただそれだけなんだね。なぜなら、わたしたちは財産も、家族も、この体も、死んだのち天国に持っていけないのだから。食べ物はどうの、着る物がどうの、お金がどうのといったことを生きる目的の第一にはいけないね。

ナレーション この人たちはどこか変わってるけれど、何か清そな感じがするのは、その「神の国」とかを目指して生きているからなのだろうか。わたしは…わたしは…本当に必要なものを求めているのだろうか。…それは、マンションでもない、シャネルの服でも靴でも、気晴らしのパチンコでもカラオケでもない、仕事でさえない…そんな気がした。

こうしてわたしは、山本家には3日お世話になった。1週間後、わたしはすっかり元気になって出社した。

(会社)

部下1 主任、今度の日曜空いてます？ 主任の全快祝い、みんなでしようと思って。

恵美子 わあ、お言葉はうれしいけど、ほかの日にしてくれる？ 日曜、約束あるのよ。

部下2 わ、お珍しい。それじゃ、火曜日は？

恵美子 いいわよ。

部下3 おい、山本。主任の日曜の予定って何だろな？ デートだったりしてな。

洋 デートはデートなんですがね、僕の小学4年の弟と教会に行く約束なんですよ。

部下3 教会？ 何でまた？

洋 いやあ、僕もよくわかりません。どういう心境の変化なのか。主任ったら大学生の弟には大事にしていたビデオカメラぽんとくれたり、弟には教会に連れてってくれていきなり言い出すんですよ。

部下3 わっかんねえなあ、お局様のやることは。

恵美子 そこ、何ひそひそしてるの。おしゃべりは昼休みになさい。

部下たち はい。

ナレーション 山本君がにこにこしながらこっちを見ている。わたしはその時、あの小さな壁掛けの言葉を思い出していた。

「なくなる食物のためにではなく、いつまでも保ち、永遠のいのちに至る食物のために働きなさい。」

これもきっと、聖書の言葉なのだろう。教会に行けば、聖書を調べれば、わたしも本当に必要なものを見つけ出すことができるかもしれない。わたしはふと、そんなことを予感していた。—————<完>